

ウィーン国立歌劇場

古き良き伝統の街ウィーンに斬新な建物が出現すると、それらは必ずといって良いほど市民の批判と揶揄の標的になってしまう。最近の例ではカールスプラッツに君臨する工科大学の「ふくろうの像」がそうであった。シュテファン大寺院のはす向かい、ハース・ハウス跡のビルも、あまり評判が良くなさそうだ。

一八六一年十二月十六日の歟入れから、一八六九年五月二十五日のオープニングまで、七年以上の年月と六百万グルデンにのぼる費用とをかけて建設された国立歌劇場も、その例外ではなかった。

建物本体の設計は、一八六〇年から六一年にかけて公募された歌劇場設計コンクールに入賞したアウグスト・フォン・シッカーツブルクが行い、内装担当はエドゥアルト・ファン・デア・ニユルであった。外装は「リンクシュトラッセ様式」ともいえるその他諸々の新しい建造物と同様に豪華なスタイルで、当時の最新技術だったセントラルヒーティング方式を取り入れ、劇場内部には延べ十九キロメートルもの暖房用パイプが設置された。

内装はともかく劇場外観の意匠が一般市民に理解され、受け入れられるまでには相当な時間が必要だった。当初は「ギリシャとゴティックとルネッサンスの様式が入り乱れた、節操に欠けたデザイン」と酷評されたのである。それに加え、建築工事開始後になってから劇場正面のリンクシュトラッセの地面が最初の計画より一メートルも上げられる事が決定し、その結果この劇場は「沈没した箱」「建築文化の敗北」「消化のために横たわっている象のように重い」などと、万人にこきおろされた。

これらフランツ・ヨーゼフ一世、建設省、新聞、建築家、加えて一般市民の批判の声に耐えきれず、ファン・デア・ニユルは一八六八年四月三日に五十六歳で自殺、同年六月十一日にはシッカーツブルクも享年五十四歳にして失意のどん底に力つき、兩人とも建物の完成を待たずして世を去ってしまった。この事件以来、

国王は何事に対しても個人的な見解を発言するのは控えるようになったという。

ウィーンの宮廷で初めてオペラが上演されたのは、一六二五年のことであった。その後一六六六年から六七年にかけて、レオポルド一世とスペインの王女マルガリータ・テレージとの婚礼祝祭の一環として、現在の国立図書館のそばに木造三階建ての歌劇場が建設され、イタリアオペラはその全盛期を迎えた。マルガリータ・テレージ王女のポートレートはヴェラスケスが多数制作しており、美術館などで御覧になった方も多いだろう。レオポルド一世の治世下、この木造劇場では四百以上のプレミエが上演された。

「貴族が率先して音楽をたしなんだ」という背景なくしては、その後のウィーンが音楽の都として世界に比類のない都市に育つ土壌は生まれなかっただろう。カール六世は自分でもオペラを作曲し、指揮も行い、マリア・アンナ大公妃やマリア・テレジア大公妃（後の女帝）はバレエを踊り、アリアを歌い、マリア・テレジアの息子ヨーゼフ二世はピアノとチェロを弾き、アリアも作曲し、と宮廷の音楽熱は相当なものであった。

長年にわたる浪費の末に国庫が涸渇し、帝国の周囲は敵ばかり、という状態にあったマリア・テレジア女帝の時代でさえ「オペラなしではこのような街に住めはしない」と、年間十五万グルデンもの補助金が国庫より支給されていた。この伝統は現在にまで続き、世界大恐慌の時ですらオペラに対しての助成金は、全く自明の事として支出されていた。

現在のザッハーホテルの位置に一七〇九年より劇場があったが、これが一七六三年「ケルントナートーア劇場」としてオープンし、一七九四年からはオペラも上演されるようになった。一八一〇年以降はオペラとバレエ専用の劇場として、一八六九年に現在の歌劇場が完成するまで使用されていた。

一九四五年三月十二日、国立歌劇場は空襲に会い、炎上した。焼け残ったのは外にある左右の噴水、正面

のメイン・エントランスとその周辺のロビーだけであった。噴水はヨーゼフ・グラツサーの作品で、左が「音楽、舞踏、喜び、無頓着」、右のものが「ローレライ（水の精）、悲しみ、愛、復讐」を表現している。同じく焼け残った上階のバルコニーにあるフレスコ画はフランツ・シューベルトの友人でもあったモリッツ・フォン・シュヴィントの手になるものである。

一九四八年から七年の年月をかけて行われた劇場再建には二億六千万シリングという、その当時何をさしおいても重要であった住居建設にあてられる国家年間予算に匹敵する程膨大な金額が費やされた。爆弾を落とした張本人であるソ連からの二百万シリングの寄付以外、ほとんどの費用は国庫と国民の寄付とによってまかなわれたのである。

再建のための設計は公募をつのり、再度コンクールによって決定された。新劇場では、それまで不便だった部分も全て改革された。

舞台衣装制作用のアトリエと倉庫は地下道で直結した別棟に移転され、劇場内にはステージ、楽屋、客席とロビー以外に、大小ふたつのバレエ・リハーサルホール、コーラスとオーケストラ用の三つのリハーサルホール、二十六メートル×十四メートルのリハーサル用ステージ、パイプオルガンつきのホール、十区画のソリスト用完全防音練習室、喫茶室、および事務系統のオフィスが作られた。全室にインターフォンとモニタースピーカーが設置され、開演中のオペラの進行は劇場内どこにいてもリアルタイムで把握できるようになった。

客席は消防法の制約もあって、それまでの二千八百八十一席より二千二百一十一席（千六百六十座席と五百五十一立ち見席）になったが、場所によっては楽譜を読めるように小さなスタンドがついた席と、難聴者用に音量を増幅して聞ける席とが設けられた。オーケストラピットは七メートルの深さまで下げる事ができ、百十人分のスペースがある。

しかし何といっても圧巻なのはステージの設備だろう。

客席から眺めたステージ開口部は幅十四・五メートル、高さ十二メートルあるが、これだけでも標準の劇場よりはかなり大きめである。メインステージは実に七百八十八平方メートルの広さがあり、高さも二十七メートルまで使用可能である。メインステージの向かって左側にあるサブステージでさえ幅九メートル、三百七十平方メートルの広さである。メインステージの奥にはもうひとつ二十一メートル幅のリアステージがあり、双方を併用すると、ステージ開口部より五十メートルの奥行きが得られる。三ステージの合計総面積は千七百平方メートルにも及ぶが、これはシュテファン大寺院の内部とほぼ同じ広さである。

メインステージには幅十八メートル×奥行き三メートルをユニットとした床面が六枚平行に設置されている。このひとつひとつが上方へ二・二メートル、下方へ十一メートル動かせるようになっており、これらを任意に組み合わせた上に舞台装置を前もって組んでおけば、公演中の場面の転換がごく短時間で処理できる。

メインステージそのもの、またサブステージやリアステージを水平や上下に移動させる事など言うに及ばず、直径十六メートル、厚さ四十五センチ、重さ四十五トンもある特設回転板を使用した場合の場面変換など、舞台設備の持つ可能性には目をみはらせるものがある。

高さ四十五メートルあるステージ上部の空間には、十一の照明用ブリッジおよび百五十本の背景用可動バー（背景を描いたシートをぶらさげる鉄棒）が牽下されている。

場内のほとんどの器具機械は電力で駆動させるようになっていて、使用電力容量はステージ関係だけで七百キロワット、劇場全体では二百七十二回路二千キロワットもの量になる。

オペラには金がかかる、というのはハプスブルク王朝の時代から衆知の事実だったが、現在ではどれ程の

費用がかかっているのだろう。

一九八七、八八年度の支出総額はウィーン国立歌劇場の場合、ざっと九十億円である。(フォルクスオペーは約四十億円) それに対しての収入総額はプログラム代、放送権利金、舞踏会収入、海外公演の収入なども含めて約三十億円(同六億円)となっている。公演回数をシーズン中約三百回とすると、国立歌劇場では一晚の公演ごとに平均二千万円、フォルクスオペーでは一千万円強の赤字が出る計算になる。

蛇足としてつけ加えておくと、オペルンバル(舞踏会)の収入はたった一晚で二億五千万円である。もったも二万本の花を使用しての飾りつけをはじめとして、準備にかかる諸経費も相当なものだろうが……。

蛇足ついでもうひとつ。公演中の国立歌劇場ステージのビデオ撮影は一分間千ドル(一九八九年現在)、というのが最低料金である。それも劇場専属のアーティストのみが出演している場面に限り、それ以外のゲストが画面に入ると、その人のギャラがこれに加算される。特別許可をとってバックステージなどを撮影するには一回約六万円(同前)の基本料金がかかる。

オーケストラ、コーラス、バレエ団を丸抱えにし、多数の劇場専属のソリストの給料、そして外部から招聘するゲスト歌手のギャラなどもさることながら、総額で平均三千万円かかる国立歌劇場での一晚の公演にたずさわる裏方さんの数も、二百六十一人という大所帯である。「最近はおペラの切符も高くなった……」などと嘆くのはオーストリアの納税義務者に対して失礼かも？

うらめしや

次から次へと押し寄せる日本からの旅行者のみならず、多くの音楽ファンにとっても一回は訪れてみる価